

社会人基礎力の知覚と社会的望ましさととの 媒介要因に関する探索的研究

高 沢 佳 司

〈要旨〉本研究の目的は、知覚された社会人基礎力と社会的望ましさととの間に自己に関連した変数やその交互作用が媒介するかどうか探索的に検討することであった。大学生87名に対し、社会人基礎力の自己評価、社会的望ましさ、自尊感情、承認欲求、自己愛的脆弱性、および特性的自己効力感を測定する質問紙調査を行った。その結果、社会人基礎力は社会的望ましさ、自尊感情、承認欲求、および特性的自己効力感との正の相関が見られた。自尊感情、承認欲求、自己愛的脆弱性、および特性的自己効力感を単一あるいは変数の組み合わせによって統制変数とし、社会人基礎力と社会的望ましさととの偏相関分析を行ったが、相関は有意なままであった。続いて社会的望ましさを目的変数、他の変数の主効果および交互作用を説明変数とした階層的重回帰分析を行った。その結果、社会人基礎力×自尊感情×特性的自己効力感の3要因交互作用が有意であった。事後解析の結果、社会人基礎力高群においては自尊感情が高いほど社会的望ましさの得点も高くなる傾向が見られた。しかしながら、社会人基礎力低群において、自尊感情高群かつ特性的自己効力感高群は自尊感情低群かつ特性的自己効力感高群よりも社会的望ましさの得点が低くなる傾向が見られた。一方、社会人基礎力低群において、自尊感情低群かつ特性的自己効力感低群は自尊感情高群かつ特性的自己効力感低群よりも社会的望ましさの得点が高くなる傾向が見られた。知覚された社会人基礎力と社会的望ましさととの連合の

社会人基礎力の知覚と社会的望ましさとの媒介要因に関する探索的研究（高沢）
間に介在するプロセスの推定、限界点と今後の課題について議論がなされた。

〈キーワード〉社会人基礎力、社会的望ましさ、自尊感情、承認欲求、自己効力感

緒言

学生が将来、社会の一員として持続的に活躍すること、また学生のうちにそのための能力を一定程度身につけるよう指導することは、教育に携わる者の関心事の一つである。これまで文部科学省や経済産業省は大学における学びの一目標として様々な指針を打ち出してきた。本研究では経済産業省（2006）による社会人基礎力（職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力）に着目し、知覚された社会人基礎力の程度といくつかの性格要因との関連について探索的に検討する。

問題と目的

社会人基礎力は前に踏み出す力（e.g., 主体性）、考え抜く力（e.g., 課題発見力）、チームで働く力（e.g., 発信力）の3大要素から構成される。職場等で求められる力として、学生の時期からそれを訓練し伸長することが教育現場で求められることの一つである（e.g., 高沢, 2017）。学生の社会人基礎力がどの程度伸長したかについては、教育評価の問題の範疇と捉えることができる。教育評価に限らず、一般に評価は正確を期する必要がある。その理由の一つとして、高沢・服部（2019）では「教育評価のあり方によっては、学習者の発達要求に応じるものとはならず、教育の質を低下させる恐れがある」と指摘されている。評価者の主観に頼らず、より客観的で、誰もが納得できる形での評価を目指すことが肝要である。

一方、「社会人基礎力を育成する授業30選 実践事例集」（経済産業省, 2014）で紹介された取り組みの中では、社会人基礎力の評価を学生の自己評価に頼る事例が少なくない。評価者の主観のみによる評価も課題があるが、取り組みの

社会人基礎力の知覚と社会的望ましさととの媒介要因に関する探索的研究（高沢）

主体（学生）による自己評価は学習成果の正確な評価に対し、客観的な行動指標等による評価よりも寄与するところが大きいのかどうか疑問が残る。一般に、自己の能力について評価を求められる際、実際よりも自己を社会的に望ましい方向へと歪めた形で報告する、社会的望ましさバイアスが知られている。社会的望ましさとは自己をより良く見せようとする傾向である（小塩, 1997）。社会人基礎力を自己評価するため質問紙法によって自己が知覚した能力の程度を測定していることが多い。その際に留意しなくてはならないのが、一般にパーソナリティ検査や個人の能力を自己評価する際には社会的に望ましい方向に回答が歪められる傾向がある点である（Edwards, 1957; Crandall & Crandall, 1965; Crowne & Marlowe, 1960; 野口, 1964; 肥田野, 1971; 斎藤, 1977）。例えば高沢（2017）では一部の社会人基礎力の知覚と社会的望ましさととの相関関係が報告されている。この調査において「働きかけ力」・「創造力」・「発信力」を除いた9つの能力要素、および社会人基礎力の総得点は、社会的望ましさ得点との有意な正の相関が見られている。このことから、社会人基礎力を知覚し自己評価する際には自己を実際よりも良く見せようとする欲求が働いた可能性を否定できない。

しかしながら、社会人基礎力の知覚と社会的望ましさととの相関関係を生じさせる背景要因については明らかにされていない。これについては、社会的望ましさが承認欲求のような他のパーソナリティ要因と重複する部分を含む（e.g., McRae & Costa, 1983）という指摘が挙げられる。承認欲求とは「自分を他者から受け入れられる状態にすること」（菅原, 2004）への欲求である。他者から承認される行動の一つに、社会的に望ましい行為が挙げられよう。社会人基礎力を自己評定するよう指示された場合、それが他者からの評価を受ける場面であれば、社会的に望ましい方向で、かつ他者から承認される方向で回答をするよう動機づけられることが考えられる。つまり社会人基礎力の知覚の文脈においても、社会的望ましさととの相関関係は承認欲求、あるいはそれに類する他のパーソナリティ要因との概念的な重複によって生ずる可能性がある。

社会的望ましさと承認欲求との連関関係が想定される一方で、承認欲求は自尊感情、自己愛的脆弱性との関連も指摘されている。まず自尊感情とは「自

社会人基礎力の知覚と社会的望ましさとの媒介要因に関する探索的研究 (高沢)

尊、自己受容などを含め、人が自分自身についてどのように感じているのか、その感じ方のことであり、自己の価値と能力に関する感覚および感情」(内田・上埜, 2010) とされる。Modigliani (1968) は他者から高い評価を得ることが自尊感情を高揚させるとしている。高い評価が得られた場合は他者から受け入れられたと考えられる。したがって自尊感情を高揚させたいという欲求が高まれば、承認欲求も並行して高まることが予想される。また、自己愛的脆弱性について上地・宮下 (2009a) は「羞恥心が強く、注目されることを避け、他者評価に過敏な自己愛パーソナリティ」と述べたうえで、小塩 (1998) の自己愛人格目録短縮版においても、承認欲求の一側面である「注目・賞賛欲求」は過敏で脆弱な自己愛傾向と関連があるとしている。上地・宮下 (2009b) においても「承認・賞賛過敏性」因子が抽出されている。このように自己愛傾向・自己愛的脆弱性と承認欲求とがある程度概念的な重複をしていると想定される。それに加えて、自尊感情は過敏型自己愛人格の特徴とされており (Broucek, 1991; Kohut, 1971)、自尊感情は過敏型の自己愛傾向から一定の影響を受けると推測される (上地・宮下, 2009b)。

続いて、社会人基礎力の知覚は自己の能力あるいはスキルに対する自己認知であるから、自己効力感との関連性が予想される。自己効力感とは「個人がある状況において必要な行動を効果的に遂行できる可能性の認知」(成田・下仲・中里・河合・佐藤・長田, 1995) であり、参加者が社会人基礎力を自己評定する際にはこの自己効力感を参照している可能性がある。

このように社会人基礎力の知覚は他のパーソナリティ要因との相関関係が想定される。また、知覚された能力としての社会人基礎力が他のパーソナリティ要因と分散を共有しているだけでなく、その媒介過程については様々な他のパーソナリティ要因との交絡性が潜在する可能性も予想される。これは、環境に適応するために自己を構成する諸特性が場面に応じて変動する可能性があるためである。例えば外向性もしくは社交性の高い個人でも、すべての対人場面において一貫して反応するわけではなく、強面の人物に対しては気後れする等の状況が考えられる。したがって単一の説明変数の主効果として目的変数を予測できるだけでなく、いくつかの変数の交互作用が見出されると想定される。

社会人基礎力の知覚と社会的望ましさとの媒介要因に関する探索的研究（高沢）

したがって本研究では、知覚された社会人基礎力と社会的望ましさとの間に媒介する変数やその交絡的効果を検討することを目的とする。特に、広く自己に関連するパーソナリティ要因との関連性を検証するため、本研究ではその代表的な要因である承認欲求、自尊感情、自己愛的脆弱性、特性的自己効力感に着目し探索的に検討を行う。

方法

(1) 調査参加者

大学生87名（女性30名。平均年齢は19.60歳、 $SD = .96$ ）であった。

(2) 測定項目

1) 知覚された社会人基礎力

西道（2009）の尺度にストレスコントロール力の項目を加えた12項目で測定した。参加者は「1. まったくない」～「11. 非常にある」の11件法で回答した。

2) 社会的望ましさ

日本語版 Social Desirability Scale 北村・鈴木（1986）の33項目によって測定した。参加者は「はい」、「いいえ」の2件法で回答した。正項目に「はい」、逆転項目に「いいえ」と回答した場合を1点、それ以外は0点とした。

3) 自尊感情

日本語版 Rosenberg Self Esteem Scale (RSES-J; Miura, Griffith, 2007) の10項目によって測定した。参加者は「1. 強くそう思わない」～「4. 強く思う」の4件法で回答した。

4) 承認欲求

賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度（小島・太田・菅原, 2003）の18項目（賞賛獲得欲求9項目、拒否回避欲求9項目）によって測定した。参加者は「1.

社会人基礎力の知覚と社会的望ましさととの媒介要因に関する探索的研究（高沢）
あてはまらない」～「5. あてはまる」の5件法で回答した。

5) 自己愛的脆弱性

自己愛的脆弱性尺度短縮版（上地・宮下, 2009b）の20項目（自己顕示抑制5項目、自己緩和不全5項目、潜在的特権意識5項目、承認・賞賛過敏性5項目）によって測定した。参加者は「1. まったくない」～「5. よくある」の5件法で回答した。

6) 特性的自己効力感

人格特性的自己効力感尺度（三好, 2003）の6項目によって測定した。参加者は「1. 全くあてはまらない」～「5. 非常にあてはまる」の5件法で回答した。

(3) 手続き

心理学系の授業時間内に受講者へ回答を依頼した。回答用紙を配布し、口頭、書面の両方で研究参加にかかるインフォームド・コンセントを得た。具体的には研究倫理、目的、安全面、個人情報の管理、論文が出版された場合のアクセス方法、研究者の連絡先等を呈示した。回答後すぐに用紙を回収し、デブリフィングを行い調査終了とした。

結果

1) 相関分析の結果

社会人基礎力の合計得点と社会的望ましさ、賞賛獲得欲求、承認欲求の合計得点、特性的自己効力感との間に有意な正の相関が見られた（表1）。また、社会人基礎力の「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、および「チームで働く力」の因子ごとに他の変数との相関係数を算出したが、社会人基礎力の合計得点による相関係数とパターンが変わらなかったため、本研究では省略した。

表 1 社会人基礎力と他の変数との相関分析結果

	社会的 望ましさ (<i>M</i> = 58.00, <i>SD</i> = 25.26)	自尊 感情 (<i>M</i> = 28.80, <i>SD</i> = 4.73)	賞賛獲得 欲求 (<i>M</i> = 27.73, <i>SD</i> = 6.98)	拒否回避 欲求 (<i>M</i> = 29.96, <i>SD</i> = 7.03)	承認欲求 合計 (<i>M</i> = 57.69, <i>SD</i> = 9.87)	-
社会人基礎力 合計 (<i>M</i> = 78.92, <i>SD</i> = 14.25)	.30 **	.51 **	.45 **	.01 <i>n.s.</i>	.32 **	-
	自己顕示 抑制 (<i>M</i> = 16.74, <i>SD</i> = 5.12)	自己緩和 不全 (<i>M</i> = 15.52, <i>SD</i> = 4.48)	潜在的 特権意識 (<i>M</i> = 15.03, <i>SD</i> = 3.77)	承認・ 賞賛過敏性 (<i>M</i> = 16.44, <i>SD</i> = 4.26)	自己愛的脆弱性 合計 (<i>M</i> = 63.22, <i>SD</i> = 12.80)	特性的 自己効力感 (<i>M</i> = 20.52, <i>SD</i> = 4.78)
	.00 <i>n.s.</i>	-.01 <i>n.s.</i>	.04 <i>n.s.</i>	-.12 <i>n.s.</i>	-.03 <i>n.s.</i>	.54 **

** $p < .01$

2) 偏相関分析の結果

単相関分析で社会人基礎力との間に有意な相関が見られた自尊感情、承認欲求、自己愛的脆弱性、特性的自己効力感を単体および組み合わせによって統制変数に投入し、社会人基礎力と社会的望ましさとの偏相関分析を行った。その結果、 $prs = .22 \sim .35$, $ps = .001 \sim .042$ といずれも有意のままであった。

3) 重回帰分析の結果

社会的望ましさを予測する回帰式を探索的に検討するため、社会人基礎力、自尊感情、承認欲求、自己愛的脆弱性、および特性的自己効力感を説明変数、社会的望ましさを目的変数とした階層的重回帰分析を行った。なお交互作用項を含むため変数をセントリングした。以降、高群とは平均値 + 1SD、低群とは平均値 - 1SD によってスライスした群を表す。分析の結果、STEP 3 の予測式が有意傾向であり ($R^2 = .392$, $p = .077$)、社会人基礎力 × 自尊感情 × 特性的自己効力感の 3 要因の交互作用 ($\beta = .02$, $SE = .01$, $t(61) = 2.43$, $p = .018$)、および自尊感情 × 承認欲求の交互作用 ($\beta = .24$, $SE = .10$, $t(61) = 2.34$, $p = .023$) が有意であった (表 2)。

表 2 社会的望ましさを目的変数とした重回帰分析の非標準化係数

変数名	Step1	Step2	Step3	Step4	Step5
切片	58.00 **	57.04 **	55.56 **	55.10 **	55.08 **
I. 社会人基礎力	.67 **	.62 *	.53	.55	.56
II. 自尊感情	.77	.71	.33	.58	.57
III. 承認欲求	-.11	-.20	-.64	-.42	-.43
IV. 自己愛的脆弱性	.39	.63 *	.53	.54	.55
V. 特性的自己効力感	-1.25 +	-.89	-1.63	-1.71	-1.69
I * II		-.02	.05	-.01	-.02
I * III		.00	-.05	-.02	-.02
I * IV		-.04	-.04	-.06 *	-.07 *
I * V		-.02	.03	.03	0.3
II * III		.08	.24 *	.22 +	.23 +
II * IV		-.01	-.08	.01	.01
II * V		-.02	-.26	.03	.02
III * IV		.03	.02	.04	.04
III * V		.00	.10	.04	.05
IV * V		.05	.04	.07	.06
I * II * III			.00	.00	.00
I * II * IV			.01	.01	.01
I * II * V			.02 *	.02 *	.02
I * III * IV			.00	.00	.00
I * III * V			.01	.00	.00
I * IV * V			.00	.00	.00
II * III * IV			-.01	-.02 +	-.02 +
II * III * V			.01	.00	.00
II * IV * V			.01	.01	.01
III * IV * V			-.01	-.01	-.01
I * II * III * IV				.00	.00
I * II * III * V				.00	.00
I * II * IV * V				.00	.00
I * III * IV * V				.00	.00
II * III * IV * V				.00	.00
I * II * III * IV * V					.00
R ²	.16 *	.22	.39 +	.43	.43

** $p < .01$ * $p < .05$, + $p < .10$

社会人基礎力×自尊感情×特性的自己効力感の3要因の交互作用を検討するため、社会人基礎力高群、低群それぞれの群における自尊感情×特性的自己効力感の交互作用の検討を行った（図1）。社会人基礎力高群においては、自尊

社会人基礎力の知覚と社会的望ましさとの媒介要因に関する探索的研究（高沢）

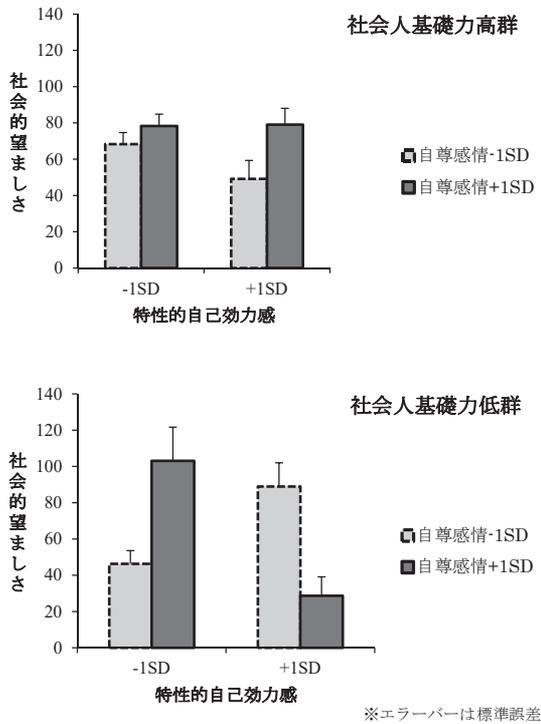


図1 社会人基礎力×自尊感情×特性的自己効力感の交互作用による社会的望ましさの得点の変化

感情の主効果が有意傾向であり ($\beta = 2.01, SE = .96, t(8) = 2.09, p = .070$)、自尊感情高群 ($M = 78.68$) は自尊感情低群 ($M = 58.75$) よりも有意に社会的望ましさの得点が高かった。一方、社会人基礎力低群においては、自尊感情×特性的自己効力感の交互作用が有意であった ($\beta = -1.83, SE = .44, t(9) = -4.16, p = .002$)。まず自尊感情低群では特性的自己効力感高群 ($M = 88.97$) のほうが特性的自己効力感低群 ($M = 46.33$) よりも有意に社会的望ましさの得点が高かった ($\beta = 6.38, SE = 1.96, t(9) = 3.26, p = .010$)。一方、自尊感情高群では特性的自己効力感高群 ($M = 28.68$) のほうが特性的自己効力感低群 ($M = 103.07$) よりも有意に社会的望ましさの得点が低かった ($\beta = -11.13, SE = 3.77, t(9) = -2.95, p = .016$)。さらに、特性的自己効力感高

社会人基礎力の知覚と社会的望ましさとの媒介要因に関する探索的研究 (高沢)

群では自尊感情低群 ($M = 88.97$) のほうが自尊感情高群 ($M = 28.68$) よりも有意に社会的望ましさの得点が高かった ($\beta = -6.30, SE = 1.91, t(9) = -3.31, p = .009$)。また、特性的自己効力感低群では自尊感情低群 ($M = 46.33$) よりも自尊感情高群 ($M = 103.07$) のほうが有意に社会的望ましさの得点が低かった ($\beta = 5.93, SE = 1.92, t(9) = 3.09, p = .013$)。

なお、自尊感情×承認欲求の交互作用も有意となったが、社会人基礎力は関与しないため今回の分析からは除外した。

考察

本研究の目的は、社会人基礎力と社会的望ましさとの間に媒介する変数やその交絡的効果を検討することであった。相関分析の結果から、社会人基礎力と社会的望ましさ、自尊感情、賞賛獲得欲求、承認欲求、特性的自己効力感との間に正の相関が見られた。社会人基礎力と拒否回避欲求、自己愛的脆弱性およびその下位因子とは無相関であった。これらの結果は、社会人基礎力が他の自己に関連する変数と一定程度の分散を共有していることを示している。

社会人基礎力と社会的望ましさとの正の相関関係に関しては、高沢 (2017) の結果を再現するものであった。相関係数はそれほど大きくないものの、現象としては頑健に観察されるものとみなすことができる。この相関関係の背景には以下のようなプロセスが想定可能である。つまり、参加者は自己の社会人基礎力を評定する際、社会的に望ましい方向へと回答をある程度歪めている可能性が示唆される。事実、高沢 (2019) では、社会人基礎力を評定する際の指示として自分に正直に回答するよう指示された短期大学の2年生は特定の指示を受けなかった2年生に比べて、社会人基礎力を低く見積もっていた。本研究で再び観測された社会人基礎力と社会的望ましさとの正の相関関係と併せて、能力を評価する際の社会的望ましさバイアスが生じている可能性は否定できない。

次に社会人基礎力と自尊感情、賞賛獲得欲求および承認欲求の合計得点、特性的自己効力感との正の相関関係に関しては、その背景プロセスについて以下のように想定することが可能である。(1) 自己の社会人基礎力を高く認識して

社会人基礎力の知覚と社会的望ましさとの媒介要因に関する探索的研究（高沢）

いると他のパーソナリティ要因の傾向を押し上げる。(2) 元々、他のパーソナリティ要因が高い場合に個別的な能力あるいはスキルである社会人基礎力も高く認識する。このように、相関関係から推定される因果関係の方向性について列挙したが、その具体的な検証については今後の研究が待たれる。

続いて社会人基礎力と拒否回避欲求、自己愛的脆弱性の合計得点およびその下位因子との相関が見られなかった点については、社会人基礎力が能力やスキルに関する変数であって、ポジティブな自己呈示に関連する変数とのみ連動することが考えられる。拒否回避欲求や自己愛的脆弱性はある方向性を持った自己呈示の諸側面を反映しているとも考えられる。例えば、拒否されたくないという欲求はあくまで快に接近する動機ではなく不快を避ける動機である。前者はポジティブな方向性での自己呈示、後者はネガティブな方向性での自己呈示と関連すると考えられる。社会人基礎力の知覚が快に接近するタイプの動機へと反応するものであるならば、逆に不快を回避する動機や欲求への反応性は相対的に低下すると見なすことも可能である。

社会人基礎力と社会的望ましさとの間に統制変数を投入した偏相関分析の結果では、いずれの統制変数も社会人基礎力と社会的望ましさとの有意な正の相関パターンを崩すには至らなかった。つまり、統制変数のみでは社会人基礎力と社会的望ましさとの変動を説明しきれず、他の要因や、要因同士の交絡が背景にあると考えられる。

本研究ではさらに、社会的望ましさを目的変数とした5要因の階層的重回帰分析を行い、社会人基礎力と他のパーソナリティ要因の交絡的効果について探索的に検証を行った。その結果、社会人基礎力×自尊感情×特性的自己効力感の3要因交互作用が有意であった。この交互作用の解釈としては、社会人基礎力が高い場合、自尊感情が高いほど社会的望ましさも高くなる傾向が見られた。つまり、社会人基礎力高群においては自尊感情と社会的望ましさも単純に正の相関関係として捉えられる。具体的には、自己を大切に認識していれば、社会的に望ましい反応が増えるか、あるいは逆に社会的に望ましい行動を取ると自己を大切に認識するようになる可能性もある。

一方、社会人基礎力が低い場合は、高い場合よりも一段階複雑なプロセスが

想定された。具体的には、社会人基礎力低群の中でも、特性的自己効力感の高低と自尊感情の高低とが交絡的效果を生んでいた。まず、社会人基礎力低群における特性的自己効力感高群では、自尊感情が高い場合には社会的望ましさを低く見積もり、自尊感情が低い場合には社会的望ましさを高く見積もっていた。この解釈としては、まず特性的自己効力感の高まりに対して、社会人基礎力の高低はさほど重要視しない個人もいると考えられる。自己効力感には課題固有の自己効力感の水準もあり（e.g., 三宅, 2000）、社会に出てから問題解決場面で求められる能力よりも別の能力に重きを置いていることがあることは容易に想像される。さらに、自己の行動を効果的に遂行しその結果もついてくるであろうと認識していても自己を大切に認識しているかどうかは別であり、自己を大切に認識していればいるほど、社会的に望ましい態度は取らない可能性がある。特性的自己効力感と自尊感情がともに高い群は、それ以上自己を他者から見てよく見せようとしなくても十分に満足しているのかもしれない。これに対し、特性的自己効力感が高いが、自己を大切に認識していない群は社会的に望ましい態度をより頻繁に取る可能性がある。能力やスキルは十分にあって、それが他者評価と結びついた時、必ずしも肯定的なフィードバックにつながっておらず、結果的により自己をよく見せようという動機に駆られるのかもしれない。

社会人基礎力の低群における特性的自己効力感低群では、特性的自己効力感高群とは真逆のパターンが見られた。具体的には、特性的自己効力感低群の自尊感情高群では社会的望ましさが高く、自尊感情低群では社会的望ましさが低かった。この解釈としては、社会人基礎力の能力やスキルは低く、特性的自己効力感も低く認識している（あるいは重視する課題固有の自己効力感が社会人基礎力と無関連な場合である）と、自尊感情が高い場合は社会的に望ましい態度を取り、自尊感情が低い場合は社会的に望ましい態度を取る頻度も減る可能性がある。特に、この群において自尊感情が高い場合とは、自己の能力やスキル、自己効力感をより高い段階に押し上げたいという欲求が背景にあり、あるいは自己の現状に対する問題意識があり、それが社会的に望ましい行動と結びつくのかもしれない。一方、この群において自尊感情が低い場合とは、自己の

社会人基礎力の知覚と社会的望ましさとの媒介要因に関する探索的研究（高沢）

能力やスキル、自己効力感を高めたいという欲求に乏しく、あるいは現状の自分に対する諦めの感情があり、社会的に望ましい行動とは結びつかないのかもしれない。

以上のように、本研究では社会人基礎力の知覚と社会的望ましさとの間を媒介すると想定されるいくつかのパーソナリティ要因や、それらの交互作用について検討を行った。偏相関分析の結果からは、媒介要因が完全に特定されず、むしろ他の要因が背景に働いていたり、あるいは要因同士の交絡的な効果によって媒介関係が決定されていたりする可能性が示唆された。また、重回帰分析の結果からは社会人基礎力、自尊感情、および特性的自己効力感の交互作用が社会人基礎力と社会的望ましさとの間に介在する可能性が示された。

本研究の知見から教育評価への示唆を鑑みると、社会人基礎力の評定を学生自身に一任することは課題がないとは言えない。例えば本研究のように参加者に特定の指示を与えずに測定を行うと、参加者のパーソナリティ要因の程度や他の要因との交絡により、社会人基礎力の知覚に影響を及ぼす可能性があるためである。同様に、高沢（2017）のように初学者が自己の能力について過大評価をするダニング・クルーガー効果のため正確な評定とはならない。それには正直に回答するよう教示するなど測定者側で統制する必要がある（e.g. 高沢, 2019）。前述のように教育評価においてはその正確性が求められるため、学生の自己評価に頼らず、客観的な測度による行動指標で評価することが望まれる（e.g. 高沢, 2017）。

本研究の限界点に触れたい。本研究の検証方法は実験操作を施していない相関関係のみの検証であり、より詳細な背景プロセスに関する因果関係については今後の研究に譲るところとなる。もう一つの限界点として、本研究では5要因の階層的重回帰分析をするにはややサンプルサイズが小さいと言える。また、大学生のみを対象としているが、他の社会的属性を持ったサンプルに対して本研究での知見を応用できるかどうかは検討の余地が残る。以上のように、より広範な範囲へと結果を一般化するためにも、研究知見を蓄積し結果の再現性や一般化可能性等についても検討する必要がある。

社会人基礎力の知覚と社会的望ましさとの媒介要因に関する探索的研究（高沢）

結語

本研究は社会人基礎力と社会的望ましさとの間に媒介する変数やその交絡的効果を検討するために行われた。特に、社会人基礎力、自尊感情、および特性的自己効力感の交互作用が社会的望ましさを予測することが明らかとなった。今後の研究課題は、想定される変数間における背景プロセスの因果関係の特定や、本研究での知見に関する再現性や一般化可能性等についてより詳細に検討することである。

謝辞

本研究の英文アブストラクト作成にあたり、本学文学部コミュニケーション学科教授、豊住誠先生には多大なるご示唆を頂戴しました。ここに記して御礼申し上げます。

付記

本研究は日本カウンセリング学会第52回大会において発表された研究に対し、データの追加および加筆修正を施したものである。

引用文献

- Broucek, F. (1991). *Shame and the self*. New York: Guilford Press.
- Crandall, V. C. & Crandall, V. J. (1965). A children's social desirability questionnaire. *Journal of Consulting Psychology, 29*, 27 – 36.
- Crowne, D. P. & Marlowe, D. (1960). A new scale of social desirability independent of psychopathology. *Journal of Consulting Psychology, 24*, 349 – 354.
- Edwards, A. L. (1957). *The social desirability variable in personality assessment and research*. New York: The Dryden Press.
- 肥田野直 (1971). 人格検査に及ぼす社会的望ましさの影響について. 高木貞二 (編). 現

- 社会人基礎力の知覚と社会的望ましさとの媒介要因に関する探索的研究 (高沢)
代心理学の課題, 東京大学出版会, 340-347.
- 経済産業省 (2006). 社会人基礎力に関する研究会 - 「中間取りまとめ」
- 経済産業省 (2014). 社会人基礎力を育成する授業30選 実践事例集」
- 北村俊則・鈴木忠治 (1986). 日本語版 Social Desirability Scale について, 社会精神医学, 9, 173-180.
- Kohut, H. (1971). *The analysis of the self*. New York: International Universities Press.
- Mimura, C., & Griffiths, P. (2007). A Japanese version of the Rosenberg Self-Esteem Scale: Translation and equivalence assessment. *Journal of Psychosomatic Research*, 62, 589-594.
- 三宅幹子 (2000). 特性的自己効力感が課題固有の自己効力感の変容に与える影響, 教育心理学研究, 48, 42-51.
- 三好昭子 (2003). 主観的な感覚としての人格特性的自己効力感尺度 (SMSGSE) の開発, 発達心理学研究, 14, 172-179.
- Modigliani, A. (1968). Embarrassment and embarrassment, *Sociometry*, 31, 313-326.
- 成田健一・下仲順子・中里克治・河合千恵子・佐藤眞一・長田由紀子 (1995). 特性的自己効力感尺度の検討, 教育心理学研究, 43, 306-314.
- 野口明子 (1964). 社会的要求性 (social desirability) に関する研究. 教育心理学研究, 12, 111-122.
- 小塩真司 (1998). 自己愛傾向に関する一研究 — 性役割感との関連, 名古屋大学教育学部紀要, 45, 45-53.
- 小塩真司 (1997). 自己愛傾向に関する基礎的研究 — 自尊感情, 社会的望ましさとの関連 —, 名古屋大学教育学部紀要 心理学, 44, 155-163.
- 斎藤耕二 (1977). 社会的望ましさ. 依田新 (監修). 新教育心理学事典. 金子書房, 368.
- 西道実 (2009). 小・中学校におけるキャリア教育プログラムの効果測定. プール学院大学研究紀要, 49, 193-207.
- 菅原健介 (2004). ひととはなぜ他人の目が気になるのか? 菅原健介 (編) ひとの目に映る自己 「印象管理」の心理学入門, 金子書房, pp.1-23.
- 高沢佳司 (2019). 社会人基礎力の知覚における正直教示の効果, 愛知学泉大学紀要, 1, 103-108.

社会人基礎力の知覚と社会的望ましさとの媒介要因に関する探索的研究 (高沢)

高沢佳司・服部壮一郎 (2019). 社会人基礎力と実習評価から見た教育実習指導, 愛知学泉大学紀要, 1, 115-121.

高沢佳司 (2017). 社会人基礎力の知覚、社会的望ましさ、およびダニング・クルーガー効果, 愛知学泉大学・愛知学泉短期大学紀要, 52, 17-26.

内田知宏・上埜高志 (2010). Rosenberg 自尊感情尺度の信頼性および妥当性の検討 — Miura & Griffiths 訳の日本語版を用いて —, 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 58, 257-266.

上地雄一郎・宮下一博 (2009a). 自己愛的脆弱性尺度の妥当性の検討 — 友人関係への影響の検討を通して —, 岡山大学大学院教育学研究科研究集録, 140, 1-6.

上地雄一郎・宮下一博 (2009b). 対人恐怖傾向の要因としての自己愛的脆弱性、自己不一致、自尊感情の関連性, パーソナリティ研究, 17, 280-291.

社会人基礎力の知覚と社会的望ましさとの媒介要因に関する探索的研究（高沢）

An Exploratory Study on Mediational Factors between Perceived
Fundamental Competencies of Working Persons and Social Desirability.

Keiji TAKASAWA

Abstract

The aim of this study was to explore whether a main effect of self-related variables or their interaction would mediate between perceived Fundamental Competencies of Working Persons (FCWP) and social desirability (SD). Eighty-seven undergraduates participated in a questionnaire survey, which measured their FCWP, self-esteem (SE), esteem needs (EN), narcissistic vulnerability (NV), and generalized self-efficacy (GSE). Results showed that FCWP positively correlated with SD, SE, EN, and GSE. Partial correlations between FCWP and SD, with statistically controlling other self-related variables and their combinations, remained significant. In addition, hierarchical multi-regression analysis in that SD as dependent variable, main effects and interactions of other variables as dependent variable, showed that the interaction of FCWP \times SE \times GSE was significant. Post hoc analysis revealed that in high FCWP group, the higher the scores of SE, the higher the SD scores participants rated. In low FCWP group, however, participants who rated higher scores both in SE and GSE reported lower SD scores than those who rated low SE and high GSE group. In contrast, participants who rated lower scores both in SE and GSE reported lower SD scores than those who rated high SE and low GSE group. Possible explanations for the link between FCWP and SD, limitations of this study, and future directions were discussed.

Keywords : Fundamental Competencies of Working Persons, Social Desirability, Self-esteem, Esteem Needs, Self-efficacy.